

2011年度 卒業論文

キリスト教正典の原型「ヨハネの福音書」

— 父・御子・御霊が【創世記～黙示録】を一体にした書 —

イムヌエル聖宣神学院

小島 聡

指導教員 藤本 満・矢木良雄

## 論文の概要

本稿は、①ヨハネの福音書をゼロから組み立てて行くことで、読者にヨハネの福音書の構造を解き明かすこと、②それを通じて読者の聖書理解を部分から全体へと広げ、聖霊の恵みをより多く分かち合える手助けをすることを目的とする。

ヨハネの福音書の全体は、天の父の声「わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう」(12:28)で貫かれた構造になっている。ここで、父が既に表した栄光は旧約時代であり、一つの出来事に絞るなら「出エジプト」である。ヨハネの福音書の1～11章の背後には旧約時代が隠されており、天の父の声があった12章において、表舞台のイエスの地上生涯と合流する構造になっている。

共観福音書と異なりイエスの旅路はヨルダン川の東に行ったり、南北間を何度も行ったり来たりしているが、これは旧約聖書中の場所の移動と同期している。背後でアブラハムがウルにいる時や民が捕囚としてバビロンにいる時はイエスもヨルダン川の東におり(1、10章)、エリヤとエリシャの時代にはイエスも北のサマリヤ(4章)やガリラヤ(6章)にいる。またイエスが行ったしるしも、背後の旧約時代の出来事に対応する。最初のしるし(2章)はモーセの、第二のしるし(4章)はエリヤの、五千人の給食(6章)はエリシャが行った奇跡であり、ラザロの復活(11章)は滅亡したエルサレムの捕囚帰還後の再建のことである。

ヨハネの福音書は旧約だけでなく新約の文書群も取り入れている。つまり、この書は「キリスト教正典の原型」である。宣教・受難・復活のパターンは共観福音書を取り入れたものであり、聖霊の注ぎは使徒の働きを、最後の晚餐での聖霊の恵みの教えはパウロ書簡を、イエスが過越だけでなく贖罪のいけにえであることはヘブル人への手紙を、21章のいくつかの記述は、黙示録を取り入れている。

ヨハネの福音書の「魚」のギリシャ語は「オプサリオン」と「イクスス」の2つが厳密に使い分けられている。6章の五千人の給食の魚は「オプサリオン」であり、21章は網の中の153匹の魚が「イクスス」、それ以外は「オプサリオン」である。もし21章が後代の編集による追加であるなら6章の五千人の給食の魚は共観福音書と同じ「イクスス」のはずだが、そうでないのは6章と21章が同じ時代に書かれたことを示す。この福音書は父・御子・御霊がヨハネに靈感を与えて書かせた創世記から黙示録までが一体となった書である。この書を皆が深く理解できたなら、我々は平和のきずなで結ばれ御霊の一致が得られるであろう。

## 目次

はじめに	1
第1章 序論	2
第1節 ヨハネの福音書の読み方	
第2節 本稿の目的	
第3節 方法	
第4節 執筆年代と記者	
第2章 ヨハネの福音書の大きな構造	6
第1節 一つに溶け合った書	
第2節 ヨハネ 12:28 を「扇の要」とする構造	
第3節 ヨハネの福音書全体を貫く「過越」	
第3章 旧約聖書の取り入れ	8
第1節 イエスの旅と旧約聖書の舞台の移動の同期	
第2節 イエスのしるしと旧約聖書中の大きな出来事	
第3節 人物による取り入れ	
第4節 その他の重要な位置情報	
第4章 滑らかにつながっている旧約と新約	18
第1節 イエスの誕生と受洗	
第2節 二つの過越で連結されているヨハネの福音書	
第5章 聖霊の恵みの取り入れ	20
第1節 贖罪の儀式のいけにえでもあったイエス	
第2節 きよめの集会	
第3節 御霊の一致	
第6章 新約の文書群をも取り入れているヨハネの福音書	22
第1節 共観福音書の取り入れ	
第2節 使徒の働きを取り入れ	
第3節 使徒たちの手紙を取り入れ	
第4節 黙示録の取り入れ	
第7章 創世記～黙示録を一つの網に入れた恵み	26
第1節 153匹の大きな魚	
第2節 初めからあったヨハネ 21章	
第3節 執筆当時の恵み	
第4節 現代の私たちに注がれる恵み	
おわりに 不思議な聖霊体験	30
引用文献	32

【聖句等の引用の表記について】

本稿では改行して聖句と文献を引用する際には、《 》、[ ]、「 」の三種類のカッコを使い分けている。

《 》 ヨハネの福音書、[ ] それ以外の聖書、「 」 聖書以外の文献である。引用した文は、字間を詰めた **MSP** 明朝体で表示した。また、ヨハネの福音書の引用には書名（ヨハネ）は入れず、章節のみを表示している。

例： 《初めに、ことばがあった。》(1:1)

[初めに、神が天と地を創造した。](創世記 1:1)

## はじめに

本稿は卒業論文として提出するものであるが、聖宣神学院の教員と神学生だけではなく、これまでお世話になった教会の教会員の方々を始めとして、クリスチャンで関心のある方には広く読んでいただきたいと願っている。それゆえ本格的な論文形式よりは、もう少し読みやすいスタイルにしたつもりである。

私は2011年から2012年に掛けてインターン実習生として姫路教会に一人で住み込む機会が与えられた。そして閑静な環境のこの地で、聖書のみことばに思いを巡らす日々を過ごすうち、私の霊的な耳と目は不思議と整えられて来て、やがてヨハネの福音書の【扇の要】である天の父の声は何を意味するかを知らされた。

《わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。》(12:28)

これが何を意味するかは序論において説明することにする。

さて、本稿が解き明かすヨハネの福音書は、従来のヨハネの福音書観とは全く異なる新しいものである。読者は驚かれることと思うが、実はそれは私にとっても同じであった。私自身も、この書を読み解く過程では、驚くことの連続であった。しかし、ヨハネの福音書は驚くべき書であるから、驚くのは当然である。読者の方々には是非、この驚くべきことに心を開いていただきたいと願っている。

私は聖書の深い学びを始めてから4年しか経っていない神学生である。そのため、本稿には小さな間違いがたくさんあると思う。しかし、大枠については間違っていないと確信している。読者の方々には、細かい間違いを発見しても寛容な目で見えていただきたい。そして、旧約と新約の多くの文書が父・御子・御霊によって一体になっている恵みの中に、どっぷりと浸っていただきたい。

私は、本稿を読んでくださった方々と、是非、この恵みを共有し、共に主のために働きたいと願っている。このことで、少しでも主のお役に立つことができるなら、それが私にとっての一番の喜びである。

## 第1章 序論

### 第1節 ヨハネの福音書の読み方

ヨハネの福音書には、天の父の声が記されている節が一つだけある。

《わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。》(12:28)

この節の前半部の「わたしは栄光をすでに現した」の〔すでに現した栄光〕とは何を指すだろうか。この解釈を複数の注解書で調べてみると、この福音書がどのように読まれているかが分かって興味深い。解釈の仕方は概ね次の三つのタイプに分けられる。

- ①この節は飛ばす。或いは、〔すでに現した栄光〕については無視する。
- ②〔すでに現した栄光〕を無視はしないが、特定は困難とする。
- ③〔すでに現した栄光〕とは何かを特定する。

①のタイプはページ数が少ない注解書に多い。②のタイプの注解は、例えば Morris は、「天からの声」であることに着目して共観福音書（マタイ・マルコ・ルカ）に記されている天の声の箇所（イエスの受洗と変貌）との関係を述べつつも、ヨハネには並行記事がないことを指摘して、〔すでに現した栄光〕が何なのかを知るの容易でないとしている（1995、p.530）。

③のタイプでは、村瀬がラザロのよみがえりであるとしている（1973、p.503）。しかし一番多いのは、一つの奇跡に限定するのではなく、イエスの地上生涯全体が父の栄光を現していると解釈する立場で、朝比奈（1997、p.208）、Carson（1991、p.441）、Kostenberger（2004、p.382）、Michaels（2010、p.694）、Ridderbos（1992、Vriend 英訳、1997、p.437）らが、この立場を取っている。

以上から分かることは、注解者たちは天の父の〔すでに現した栄光〕を、イエスの地上生涯の中に求めていることである。私が調べた限りでは、このことを旧約聖書の出来事に求めている注解書は一つもなかった。

ヨハネ 12:28 は解釈上の重要な分岐点である。〔すでに現した栄光〕を旧約の時代に求めるか新約の時代に求めるかで、見晴しの良い展望台に辿り着けるか、そうでないかが決まってしまうのである。

ヨハネ 12:28 の「わたしは栄光をすでに現した」は、天の父が旧約時代に行った出来事に求めなければならない。一つに限定するなら、「出エジプト」の出来事

である。一つの出来事だけでなく旧約全体の可能性もあるが、いずれにしても、旧約時代の出来事であることは間違いない。なぜなら、そう解釈することによって、これまでヨハネの福音書で謎とされていることの多くが解決するからである。

ヨハネの福音書で謎とされていることについては、詳しく書いていると先に進めないで省略するが、いくつか簡単に記すなら、東西南北に複雑に移動するイエスの旅の経路の謎（共観福音書では北から南への単純移動だけ）、2章という早い段階で登場する宮きよめの記事の謎、2回目ではないのに「第二のしるし」となっているヨハネ 4:54 の癒しの奇跡の謎、派手で目立つ奇跡なのに共観福音書には書かれていないラザロのよみがえりの記事の謎、十字架の日は共観福音書は逾越の食事の「後」なのにヨハネでは「前」である謎などである。これらの謎が、ヨハネ 12:28 の解釈を旧約時代にまで広げることで、大半が解決するのである。

ヨハネの福音書を読む時は、思考範囲を大きく広げなければならない。この福音書に旧約時代が含まれることを知った時に私は非常に驚いたが、マタイ・マルコ・ルカの福音書をも含むことを知って、再び驚いた。そして、使徒の働きや黙示録までもが含まれることを知ってさらに驚いた。このように、私の思考の範囲は常に狭く、この福音書がその範囲を超えていることを知るたびに驚いた。人間とは何と狭い範囲のことしか考えられない小さな存在であろうか。

ヨハネの福音書を読む時は、自分の思考範囲が狭いことを意識して、いつも広げることを考えて読むべきである。思考範囲が狭いままでは、ヨハネの福音書の雄大さの中にどっぷり浸る恵みを得ることは、なかなか出来ないであろう。

## 第2節 本稿の目的

本稿は、①ヨハネの福音書をゼロから組み立てて行くことで、読者にヨハネの福音書の構造を解き明かすこと、②それを通じて読者の聖書理解を部分から全体へと広げ、聖霊の恵みをより多く分かち合える手助けをすることを目的とする。

①の目的では、私がヨハネの福音書の構造を知るために行った解体作業の逆を辿り、組み立て作業に付き合っていただく。一度バラバラにした聖書を、神の導きを感じながら再度組み上げて行く作業は、極めて大事な工程である。聖書信仰を持たない聖書学者の研究書などを読むと、聖書をバラバラに分解して放置しているような感じを受ける。機械の構造を知るためにバラバラに分解することは悪

いことではない。しかし、分解したままでは、もはや機械としては機能しない。聖書も同様であろう。構造を知るためにバラバラにすることは、やむを得ないことである。しかし、分解しただけで組み立てないのであれば、それはもはや聖書ではない。Ramm は『聖書解釈学概論』の中で、「神が聖書において語られたことを確認すること」の重要性を指摘している（1956、村瀬訳、1963、p.28）。分解して放置したままなら、神が語られたことの確認はできないであろう。

②の目的を掲げたのは、同じく Ramm が指摘するように、「あらゆる聖書解釈の目標は、それを聞く人々のうちに生じる、霊的結果と言うべきである」ためである（前掲書、p.137）。特に本稿でこれから行うヨハネの福音書の構造の解き明かしは、読者が聖霊の恵みを得る大きな助けになると私は確信し、期待している。

### 第3節 方法

#### 1 ヨハネの福音書のゼロからの組み立て

本稿は、ヨハネの福音書をゼロから組み立てることを試みる。この試みの目的は執筆過程を正確に再現することではなく、前節で述べたようにヨハネの福音書の構造を解き明かすことである。従って、実際に記者のヨハネが執筆した過程と大幅に異なっていたとしても、それは問題ではない。

ゼロから組み立てる方法は、完成品を分解していく方法に比べて、ヨハネの福音書の背後に隠されている構造を読者に説明するのに、優れた効果を発揮すると期待している。読者の多くは、完成品としてのヨハネの福音書に既に自分なりのイメージを持っているので、新たなヨハネの福音書像を説明しても、受け入れていただくのはなかなか難しいと予想される。しかし、ゼロから始めるのであれば、先入観を排して、組み立ての工程の中に、共に入って来ていただけると期待している。

#### 2 三位一体論的アプローチ

本稿が父・御子・御霊に注目する場合には、可能な限り三位一体論の位格順に従い、まずは御父から注目することにする。

四福音書の中で「父」という言葉が使われている節の数を調べると、その数はヨハネの福音書がトップである。マタイ 58 節、マルコ 17 節、ルカ 49 節、ヨハ



ネ 114 節と、ヨハネが頭抜けて多いのである。このことだけでも、ヨハネでは父から注目しなければならないと言えるであろう。また、Kinlaw は『エマオの道で』の 11 月 18 日の霊想の中でヨハネの福音書について、次のように述べている(2002、山崎・小川・矢木訳、2006、p.371)。

「私は数十年もヨハネの福音書を読み続けてきましたが、最近ようやくこの福音書の主人公は主イエスではないと気づかされました。ヨハネの福音書の主人公は父なる神です。」

本稿の冒頭で、天の父が〔すでに現した栄光〕をイエスの地上生涯の中に求めることの誤りを指摘したが、Kinlaw のこの文もまた、ヨハネの福音書の読者の視点が、いかにイエスに集中しやすいかということを示している。しかし、順番から言えば、父なる神に先ず注目しなければならない。キリスト教の三位一体論では第一の位格は父である。

『新キリスト教辞典』は三位一体の神の定義を次のように説明している(牧田、1991、p.476)。

「聖書の神の三位一体性を次のように定義できるであろう。『神の統一性の中に、ひとつの本質、力、永遠性をもつ三つの位格がある。すなわち、父なる神、子なる神、聖霊なる神である。み父は何からでもなく、生まれもせず、出もしない。み子は永遠にみ父から生まれる。聖霊は永遠にみ父とみ子から出る』(「ウェストミンスター信仰告白」2:3)」

そして、順番については、「存在の秩序においては、父が第 1、子が第 2、聖霊が第 3 であって、この秩序は逆転できない」(前掲書、p.477) とある。本稿では、この位格順に従って、まず父から注目して行く。

#### 第 4 節 執筆年代と記者

ここで、ヨハネの福音書の執筆年代と記者の問題に対する本稿の立場を表明しておく。ヨハネの福音書の執筆年代には様々な説があるが、私は 1 世紀末に少し時間を掛けて書かれ、最終的な完成は黙示録のやや後であったらろうと考える。Smith は「われわれは伝統的な見解にしたがって、ヨハネ福音書が一世紀の早い時期ではなく、遅い時期に書かれたことを認める」と書き、その理由の一つとして「福音書の物語の、後の時代の反映を見、また前の時代に溯行反映する性格か

らすれば、(中略) 伝統を支持すべきである」(1995、松永訳、2002、p.9) としている。ヨハネの福音書は、まさにそのような性格の書である。

また、この福音書の記者も伝統に従って使徒ヨハネと考える。本稿でこれから明らかにして行くが、ヨハネの福音書の持つ驚くべき構造は、使徒の権威が与えられた者でなければ、とても構想できなかつたものではないかと思う。

## **第2章 ヨハネの福音書の大きな構造**

### **第1節 一つに溶け合った書**

ヨハネの福音書は旧約聖書と新約の多くの文書の一つにまとめた書である。つまり、「キリスト教正典の原型」と言える書である。ただし、集めたものをただ単に束ねたようなものではなく、溶けて一つになっているかのようなのである。そのため、それが様々な文書の集合体であることがほとんど分からない。なぜ分からなくなるほど徹底的に溶かしてしまったのか、それは多分、つなぎ目が目立つ書を読んだとしても、あまり恵まれないからであろう。私たちがこれまで、この福音書から多くの恵みを受けて来たのは、つなぎ目を意識せず一つの書として読めたからである。それゆえ、これは感謝なことであった。しかし、あまりに絶妙に溶け合っているので、執筆当時から何十年か経った後には、この福音書が多数の文書の集合体であることが、誰にも分からなくなってしまった。そのため、分かっていたら、さらに多くの恵みを受けることができるのに、それが出来なくなってしまったのである。本稿はその恵みを回復させたいと願っている。恵みをもたらすヨハネの福音書の構造はどうなっているのか、まず大きな構造から見て行くことにしよう。

### **第2節 ヨハネ 12:28 を「扇の要」とする構造**

ヨハネの福音書に含まれる一つ一つの書を扇子の骨に例えるなら、先ずはそれらを束ねる必要がある。そして、束ねる役割の「扇の要」がヨハネ 12:28 の天の父の声である。

《わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。》(12:28)

このことを次の図1の概念図で示す。

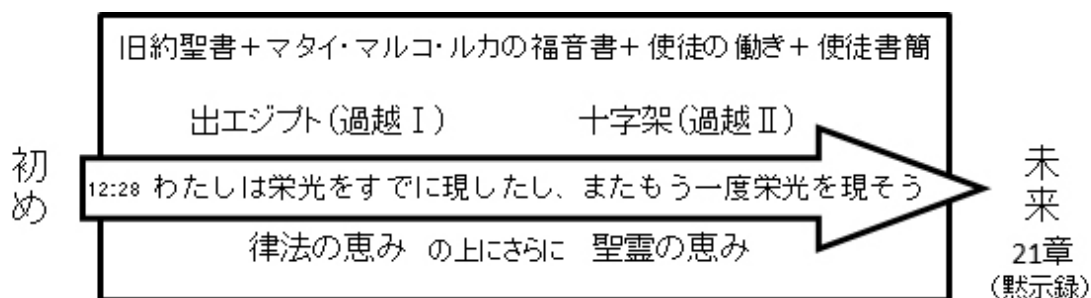


図 1 旧約と新約の文書を貫くヨハネ 12:28

「扇の要」が全ての扇子の骨を貫くように、ヨハネ 12:28 が全ての文書を貫いているのである。序論で述べたように天の父が言った、「わたしは栄光をすでに現した」を一つの出来事に絞るなら、それは出エジプトの出来事である。天の父は十戒の冒頭で、

[わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。](出エジプト 20:2)

と語って以来、旧約聖書の中で何度も何度も、神ご自身がイスラエルの民をエジプトから連れ出したことを繰り返している。つまり、出エジプトの出来事が旧約聖書全体を貫いているのである。

そして、父の声の「またもう一度栄光を現そう」とは、十字架のことである。十字架は使徒たちが書いた新約時代の文書全体を貫いているので、ヨハネ 12:28 は旧約時代と新約時代の正典の文書の全体を貫いているのである。

### 第 3 節 ヨハネの福音書全体を貫く「過越」

図 1 の出エジプトと十字架の後のカッコにそれぞれ過越Ⅰと過越Ⅱと記入した。過越はヨハネの福音書全体で極めて重要な位置を占める。記者ヨハネは同じ 12 章の 38 節で、

《それは、「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。また主の御腕はだれに現されましたか」と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。》(12:38)

と書いてイエスの十字架はイザヤ書 53 章の成就であるとしている。イエスは「ほふり場に引かれて行く羊」(イザヤ 53:7) なのだ。ヨハネは福音書全体を、出エジプトと十字架の二つの過越で貫く構成にした。旧約・新約の多彩な文書がこの

一貫した流れの中にきれいに取り込まれているので、福音書全体が一体化しているように見えるのであろう。このヨハネの福音書を貫く過越については、本稿 4 章 2 節において詳しく述べる。

### 第 3 章 旧約聖書の取り入れ

#### 第 1 節 イエスの旅と旧約聖書の舞台の移動の同期

本章では記者のヨハネが旧約聖書を、イエスの宣教・受難・復活という福音書の形式の中に、どのようにして取り入れているかを説明する。

ヨハネの福音書は驚くべき方法で、旧約聖書の時代をイエスの地上生涯の時代と重ねている。その一つが、イエスの東西南北への移動を旧約聖書の舞台の移動と同期させていることである。図 2 にその流れを示す。

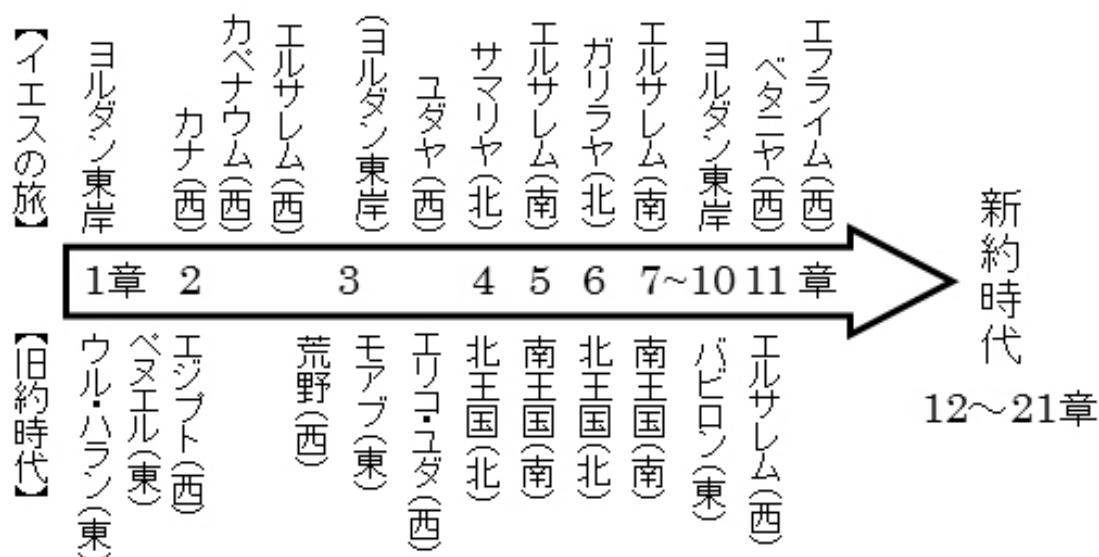


図 2 イエスの旅と同期している旧約聖書の舞台の移動

ヨハネの福音書ではイエスがヨルダン川の東岸にいる時には旧約聖書の舞台もヨルダン川の東側にある。イエスがヨハネ 1 章でヨルダン川の東岸にいた時は、創世記 11~12 章のアブラハムがまだカナンに入る前、ウルとハランにいた時と重ねている。また、イエスがヨハネ 10 章の終わりでヨルダン川の東岸に移動したことは、バビロン捕囚と重ねられている。また、イエスはヨハネ 3:22 でユダヤの地に行ったことが書いてあるので、その前にヨルダンの東岸にいたことを示す。

これは、ヨシュアの時代にイスラエルの民がヨルダン川を渡って西岸のエリコに入ったことと重ねているのである。

ヨハネ 4～7 章のイエスの南北間の移動は、列王記の北王国と南王国の時代と重ねている。ヨハネ 4 章と 6 章は北王国のエリヤとエリシャの時代であり、ヨハネ 5 章はその頃までの南王国と重ねてある。そしてヨハネ 6 章の終わりに北王国は滅亡したため、ヨハネ 7 章からは南王国が舞台となっている。しかし、ヨハネ 10 章の終わりにバビロンに捕囚として引かれて行ったので、その時はイエスもヨルダン川の東側に移動したのである。そしてイエスが再びヨルダンの西側に戻ってラザロをよみがえらせたヨハネ 11 章は、ハガイ・ゼカリヤの時代にエルサレムの神殿が再建されたことと重ねている。

## 第 2 節 イエスのしるしと旧約聖書中の大きな出来事

旧約聖書の時代は、イエスが行ったしるしによっても表されている。ヨハネの福音書でイエスが人前で行った奇跡について具体的に記されているのは、2 章の最初のしるしと過越の祭りの間のしるし、4 章の第二のしるし、5 章のベテスダの池の病人のいやし、6 章の五千人の給食、9 章の盲人の癒し、11 章のラザロの復活である。以下、これらについて簡単に説明しよう。

### 1 最初のしるしと過越の祭りの間のしるし（ヨハネ 2 章）

イエスはカナの婚礼で水をぶどう酒に変える奇跡を行った（2:1-11）。次いで 23 節には、過越の祭りの祝いの間に奇跡を行ったことが書かれている。前節で説明したイエスの旅と同期した旧約の時代を当てはめると、ヨハネ 2 章は出エジプトの時代である。

従って、最初のしるしの水をぶどう酒に変えた奇跡は、モーセがナイル川の水を血に変えた奇跡のことである。これはエジプトのパロにとっては十の災いの最初のものであり、残りの九つの災い（かえる、ぶよ、あぶ、家畜の疫病、腫物、いなご、暗闇、初子の死）が、ヨハネ 2:23 のイエスが過越の祭りの祝いの間に行った奇跡と重ねてある。

ちなみにモーセとイスラエルの民を追ったパロの軍勢が葦の海（または紅海）の水に飲み込まれた出来事は、ヨハネ 2:17 で引用されている詩篇 69:9 と同じ詩

篇 69 篇の 2 節に隠してある。

[私は大水の底に陥り奔流が私を押し流しています。](詩篇 69:2)

ヨハネ 2:23 にはイエスがエルサレムで行ったしるしを見て多くの人々が御名を信じたとあるが、エジプトを出た民もまた、主とモーセを信じたとある。

[イスラエルは主がエジプトに行われたこの大いなる御力を見たので、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。](出エジプト 14:31)

しかし、しばらくしてイスラエルの民は荒野で不平不満をつぶやくようになった。ヨハネ 2:25 に「イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられた」とあるが、御子はイスラエルの民の荒野のつぶやきも知っておられたのである。

## 2 第二のしるし (ヨハネ 4 章)

旧約聖書には神の御業が多く記されているが、預言者が大勢の人々の前でパフォーマンス的に派手な奇跡を行った記事があるのは、モーセとエリヤぐらいである。エリシャは多くの奇跡を行ったが、そんなに大勢の人の前ではない。しかし、モーセはエジプトで、エリヤはカルメル山で (I 列王 18 章)、全イスラエルの前で奇跡を行って見せたのである。

従って、モーセの「最初のしるし」に次ぐ「第二のしるし」(ヨハネ 4:54) はエリヤが行ったしるしに重ねたものである。

## 3 ベテスダの池の病人のいやし (ヨハネ 5 章)

これは南のエルサレムでの出来事であるので、北王国でエリヤが預言していた頃までの、南王国の出来事と重ねてある。

38 年もの間、病気にかかって歩けないでいた者が旧約聖書のどこと重ねてあるかは難問であるが、正解はアサ王が治世の第 39 年に両足の病気にかかったことであると私は考える。

[アサはその治世の第三十九年に、両足とも病気にかかった。彼の病は重かった。ところが、その病の中でさえ、彼は主を求めることをしないで、逆に医者求めた。](II 歴 16:12)

39 年目のこの時、アサ王は主を求めなかった。逆にヨハネ 5 章のベテスダの池の病人は 39 年目にイエスが「よくなりたいか。」(5:6) と聞いた時、まず「主よ。」

(5:7) と言った。この病人はイエスが主であることを認めて、主を求めた。イエスはこれを義と認めて病人を癒したのである。

アサ王は主を求めなかったので癒されなかった。ベテスダの池の病人は主を求めたので癒された。この二つは逆のパターンであるが、ヨハネ 2 章のカナの婚礼でイエスが水をぶどう酒に変えた恵みも、ナイル川の水が血になる災いと重ねてある。ヨハネはこのように逆のことを重ねる手法も用いているのである。

#### **4 五千人の給食 (ヨハネ 6 章)**

ヨハネ 5 章で南のイスラエルにいたイエスは 6 章では北のガリラヤにいる。従って、これは北王国での出来事である。イエスは「大麦のパン」5 つと小さい魚 2 匹で、五千人の食事を賄った。これは、Ⅱ列王 4:42-44 でエリシャが「大麦のパン」20 個と一袋の新穀で百人を賄った出来事と重ねてある。

#### **5 盲人のいやし (ヨハネ 9 章)**

この、イエスが南で盲人の目を開いた出来事は、次のヨハネ 10 章の背後でのバビロン捕囚が目前に迫っていた時期のことである。盲人の目が開くことは霊的な目が開くことと重ねてであるので、この 9 章の出来事は、南王国の善王ヨシヤによる宗教改革と重ねているのだろう。ヨシヤ王の時代に神殿で律法の書が見つかり (Ⅱ列王 22:8)、王はこの書物にしるされている契約のことばを実行することを誓ったのである (Ⅱ列王 23:3)。

#### **6 ラザロのよみがえり (ヨハネ 11 章)**

ヨルダン川の東岸 (バビロン捕囚) から西岸に戻ったイエスはラザロの墓に向かう途中で「涙を流された」とヨハネ 11:35 は記している。バビロニアにより破壊し尽くされたエルサレムを見てイエスは泣いたのだ。そうしてイエスがよみがえらせたラザロとは、エルサレムの市街のことだろうか、それとも神殿であろうか。私は神殿であると思う。

人間のラザロを神殿に例えることには若干の違和感を覚えるが、人間の肉体が滅びるように、神殿もいつかは滅びることであろう。実際にエルサレムの第二神殿は紀元 70 年に破壊され、記者のヨハネはこの事実を知っているのだ

るから、ヨハネ 4:21 でイエスが「あなたがたが父を礼拝するのは、この山でもなく、エルサレムでもない、そういう時が来ます」と言ったこととを考え合わせると、感慨深いものがある。ヨハネは時代を何重にも重ねている。

### 第3節 人物による取り入れ

前節で、旧約時代にしるしを行ったモーセ・エリヤ・エリシャについて述べたが、記者のヨハネはこのように、人物によっても旧約聖書を取り入れている。

新約の人物と旧約の人物の重ね方の基本的な特徴としては、イエスが旧約の預言者と重ねられていることである。ただし、もう一人、新約時代の重要な登場人物としてバプテスマのヨハネがいるので、事情はもう少し複雑である。以下に、①イエスと②バプテスマのヨハネと、③その他の人物の3つに分けて説明する。

#### 1 イエス — 御父と人間とをつなぐ「ことば」

記者ヨハネは、イエスを旧約時代の預言者たちと重ねている。その存在が明白に見えるのはモーセ・ダビデ・エリヤ・エリシャ・ホセア・ヨエル・イザヤ・ミカ・エレミヤ・エゼキエルらであり、アモス・ゼパニヤ・ハガイ・ゼカリヤ・マラキらの影も見える。ダビデは預言者というよりは王であるが、詩篇の作者であり、使徒の働きでは「聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかった」（使徒 1:16）、「父祖ダビデについては、私は確信をもって言うことができます。（中略）彼は預言者でした」（使徒 2:29,30）とあるように、預言者として扱っている。

上述の使徒 1:16 でペテロが言った「聖霊が〇〇〇の口を通して預言された聖書のことば」という表現は極めて重要である。〇〇〇にはダビデだけではなくモーセ・エリヤ・エリシャ・イザヤ・エレミヤら全ての預言者名を入れられる。モーセたちが言ったことばは、聖霊が与えたことばなのである。さて、三位一体論やヨハネ 14:16、14:26、15:26、16:7 によれば聖霊は御父と御子が遣わすのである。つまり、モーセたち預言者が語っているのは、父と御子が語っているのと同じことなのだ。ヨハネの福音書の冒頭の、

《初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。》(1:1)

は、聖書に記されている預言者のことばは御子ご自身のことばである、という意



味を持つのではないだろうか。

## 2 バプテスマのヨハネ — 新しい時代への道を切り開く先導者

ヨハネ 1 章でバプテスマのヨハネは、自分のことをエリヤではなく (1:21)、  
《私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んで  
いる者の声です。》(1:23)

と言っている。ヨハネの福音書のバプテスマのヨハネは、主の道を整える先導者  
である。その役割は、まだ道が無い所に道を作り、後の者たちが通りやすくする  
ことである。この役割が与えられた彼は、a) アブラハム、b) サムエル、c) バプ  
テスマのヨハネ自身、の 3 つの異なる役を演じている。

### a) アブラハム

イスラエル 12 部族の父はヤコブ (イスラエル) であるので、ヤコブの祖父の  
アブラハムは、その先導者と言える。ヨハネ 1 章で登場するバプテスマのヨハネ  
は、ヨルダン川の東岸にいた。

《この事があったのは、ヨルダンの向こう岸のベタニヤであって、ヨハネはそこでバ  
プテスマを授けていた。》(1:28)

本章第 1 節で説明したように、このヨルダン川東岸での出来事は、アブラハムが  
まだカナンに入る前の、ウルやハランにいた頃に重ねているのである。

### b) サムエル

サムエル役のバプテスマのヨハネは、ヨハネ 3 章に登場する。彼は言った。

《あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。》(3:30)

あの方とは、新約ではイエスのことであるが、旧約ではダビデ王のことである。  
サムエルはサウルに油を注ぎ (I サムエル 10:1)、ダビデにも油を注いだ (同  
16:13)。イスラエルを治める者が、さばきつかさから王へと移ったのは、民が王  
を望んだからであるが (I サムエル 8 章)、サムエルは王の時代への道を開いた。  
バプテスマのヨハネはそのサムエルとも重ねられているのである。

### c) バプテスマのヨハネ自身

サムエルがダビデ王のために道を備えたのと同じように、バプテスマのヨハネ  
自身はイエス・キリストのために道を備えた。

以上、バプテスマのヨハネの三つの役割を見ると、彼の果たした役割がいかに大きかったかが、よく分かる。バプテスマのヨハネはアブラハム級、サムエル級の偉大な働きをしたのである。

ここで、ヨハネの福音書の主要な登場人物・事物と、旧約時代の人物・事物との関係を図 3 で示しておく。縦の点線は章の区切りを示す。

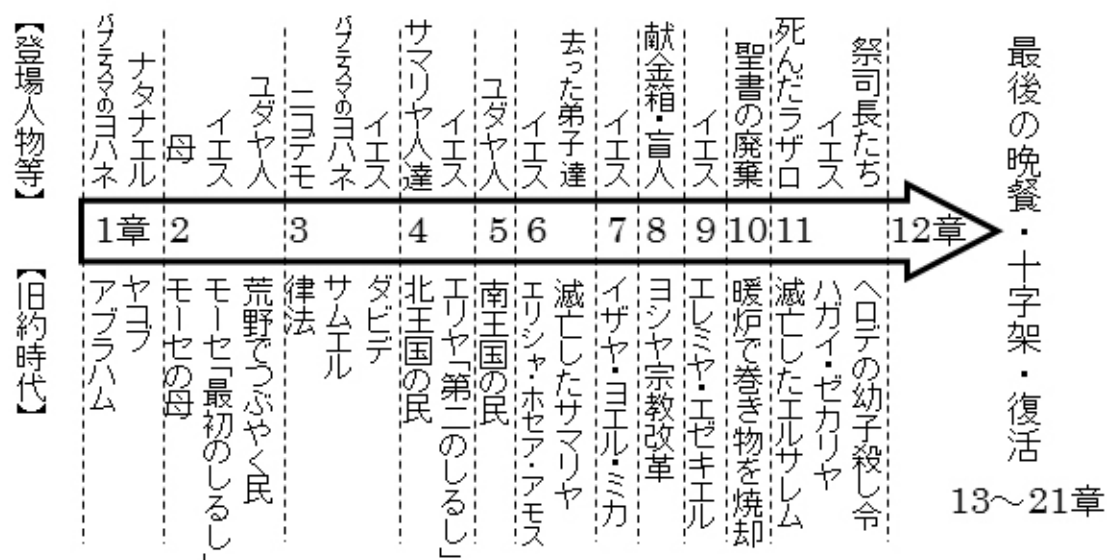


図 3 ヨハネの福音書の登場人物と旧約時代の人物との関係

### 3 その他の人物

#### a) ナタナエル

ナタナエルはヨハネの福音書だけに登場し、共観福音書には登場しない。ナタナエルには、旧約聖書ではイスラエル 12 部族の父のヤコブ（イスラエル）の役が与えられている。

ヨハネ 1:47 でイエスはナタナエルを見て、「これこそ、ほんとうのイスラエル人だ。彼のうちには偽りが無い」と言った。ヤコブは、父イサクと兄エサウを欺く（創世記 27 章）という偽りの人生を歩んでいた。しかし、ペヌエルで神と格闘し、「あなたの名は何というのか。」と問われて、「ヤコブです。」と答えた時に、彼から全ての偽りが取り去られた（藤本、2005、pp.94-104）。そして神の人から

「あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。」と言われたのである（創世記 32 章）。

#### **b) イエスの母**

ヨハネ 2:4 でイエスは母に冷淡とも言えることを言う。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方」。これは、モーセの境遇と重ねているのであろう。エジプトの王パロがヘブル人の男の子が生まれたら殺す命令を出したため（出エジプト 1 章）、我が子を殺せなかった母はモーセをナイル川の岸に置き、モーセはパロの娘に拾われた（出エジプト 2 章）。王女の息子になったモーセにとって、母は乳母ではあったが、他人であった。神の御子イエスにとっての母マリヤも、乳母と言えるのかもしれない。

#### **c) ニコデモ**

ニコデモもヨハネの福音書だけの人物であり、3 章、7 章、19 章に登場する。ニコデモは新約ではパウロの役が与えられている（本稿 6 章 3 節）と考えられるが、旧約聖書上では、律法の象徴としての役割が与えられていると考えられる。特にヨハネ 3 章でその性格が強い。ヨハネ 2 章が出エジプトの出来事と重ねられているので、ヨハネ 3 章のニコデモの登場は、イスラエルの民がシナイ山でモーセを通じて、十戒等の律法が神から授与されたことと重ねられているのである。

#### **d) ユダヤ人たち**

ヨハネの福音書には、「ユダヤ人たち」と書かれた人々が何度も数多く登場する。このユダヤ人たちに与えられた旧約聖書上の役割は、預言者の預言に耳を傾けず、神に反逆し続けたイスラエルの民である。

神に反逆し続けたイスラエルの民は、荒野の四十年間の放浪、サマリヤ滅亡、エルサレム滅亡という報いを受けたが、さらにイエスの後の時代においても紀元 70 年にエルサレムの第二神殿の崩壊という報いを受けたのである。

#### **e) サマリヤ人の女**

ヨハネ 4 章の前半でイエスが話しかけたサマリヤ人の女には夫が 5 人あったが、いま一緒にいるのは夫ではないということだ(4:18)。過去に夫が 5 人もいたとは、いかにも多い。それに、いま一緒にいるのは夫ではないというのも奇妙である。これは、次のように解釈できる。

ヨハネ 4 章のこの箇所の後には第二のしるし (4:54) のことが書かれており、

これは前述した通り、エリヤが行ったしるしのことである。エリヤはアハブ王の時代の預言者である。アハブ王は北王国の7代目の王であるので、サマリヤ人の女と一緒にいた夫たち6人は、アハブ王の前の6人の王たち、ヤロブアム、ナダブ、バシャ、エラ、ジムリ、オムリであろう。6人目は夫ではないというのは、オムリの時代にイスラエルの民は二派に分裂していた（Ⅰ列王 16:21）という事情のためではないだろうか。

サマリヤ人の女は、この時代の北王国の民と重ねられている。一人の夫との結婚生活が続かなかった女の境遇は不幸であったが、金の子牛の礼拝を奨励されてまことの神を知らなかった北王国の民も不幸であった（Ⅱ列王 12:28）。

#### **第4節 その他の重要な位置情報**

記者ヨハネは、しるしと人物以外にも、旧約聖書中の出来事を福音書の中の所々に挿入している。これらの一つ一つは、そこが背後の旧約のどこの時代に当たるかの位置情報を与える、極めて重要な道標である。

##### **1 荒野で上げた蛇**

ヨハネ 3:14 に民数記 21:9 の「モーセが荒野で蛇を上げた」話が出て来る。これにより、この箇所背後の旧約時代は、民数記の時代であることがわかる。

既述したようにヨハネ 3:1 のニコデモの登場は出エジプト記後半とレビ記のシナイ山での律法の授与を示し、このモーセの蛇の民数記を経てヨハネ 3:22 の「イエスは弟子たちと、ユダヤの地に行き」は、ヨシュア記のヨルダン渡河を示す。そしてヨハネ 3:30 の「あの方は盛んになり私は衰えなければなりません」はサムエル記のダビデの時代の始まりを示し、次のヨハネ 4章の始めはもう列王記の時代であり、ソロモンの王国が南北に分裂している。ヨハネ 3章の背後では、旧約の時代が極めて足早に進んでいることがわかる。

##### **2 ベツレヘムでのキリスト誕生の預言**

ヨハネ 7:42 に「キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘム村から出る、と聖書が言っているではないか」とあるので、この箇所背後の旧約の時代は、ミカ 5:2 でベツレヘムでのキリストの誕生を預言した、預言者ミカの

時代である。

ミカ 1:1 に「ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に」とあるので、このヨハネ 7:42 の背後は、まだヒゼキヤの時代であることがわかる。

### 3 献金箱

ヨハネ 8:20 に「イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された」とある。これは、ヨシヤ王の時代に律法の書が見つかった出来事（Ⅱ列王 22 章）と重ねてあると思われる。この時代、「宮にあった金を箱からあけて、これを主の宮で工事している監督者たちの手に渡し」（Ⅱ列王 22:9）、宮の修理のための木材や切り石を買ったのであった。律法の書は、この宮の修理中に見つかり、これがきっかけでヨシヤの宗教改革が始まった。ヨハネ 9 章でイエスは盲人の目を開いたが、ヨシヤの宗教改革で人々の霊的な目が開かれたことと関係していると思われる。

### 4 盗人・強盗

ヨハネ 10:1 でイエスは「羊の囲いに門から入らないで、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です」と言った。この時、背後の旧約時代ではエルサレムの滅亡が目前に迫っていた。「盗人で強盗」は外国の略奪隊と重ねてある。即ち、エホヤキム王を攻めた「カルデヤ人の略奪隊、アラムの略奪隊、モアブの略奪隊、アモン人の略奪隊」（Ⅱ列王 24:2）のことであろう。

### 5 聖書の廃棄

上述のエホヤキム王は、とんでもない悪王であり、エレミヤが預言した主のことばを書きしるした巻き物を暖炉の火で全て焼き尽くすという暴挙を行った（エレミヤ 36 章）。彼の前に暖炉があったのは季節が第九の月の冬だったからである。

ヨハネ 10 章でイエスはこの暴挙を糾弾している。その時イエスは宮きよめの祭りでエルサレムにいたとヨハネ 10:22 にある。宮きよめは第九の月の冬に行われていたものである。この時、イエスはユダヤ人たちに「聖書は廃棄されるものではない」（10:35）と言った。これは背後の旧約時代にエホヤキムが主のことばが書かれた巻き物を燃やしたことを批判しているのである。

## 第4章 滑らかにつながっている旧約と新約

### 第1節 イエスの誕生と受洗

11章から12章に掛けてヨハネの背後の時代は旧約から新約の時代に入る。驚くべきことに、このつなぎ目はシームレスと言ってよいほどほとんど目立たない。それほどまでヨハネの福音書の旧約と新約とはしっかりと溶け合っただ一つになっているのである。Lloyd-Jones は『旧約聖書から福音を語る』の中で「聖書は一冊の書物だ」(1995、Catherwood & Desmonnd 編、中台訳、2008、p.259) ということ強調しているが、ヨハネの福音書の11章から12章に掛けて存在する旧約と新約の間のつなぎ目の滑らかさを見ると、本当にLloyd-Jones の言う通りに「聖書は一冊の書物だ」ということを実感する。

さて、記者のヨハネがイエスの誕生をどこに忍び込ませたかと言うと、それは11章の最終節であろう。

《さて、祭司長、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は届け出なければならないという命令を出していた。》(11:57)

これはヨハネの福音書だけにある記事である。共観福音書では祭司長たちは民衆を恐れていたのだ(ルカ 20:19、22:2 など)、このような命令は出していない。ここでヨハネは、イエスが生まれたばかりの頃にヘロデ王が幼子のイエスを捜し出して殺そうとしたこと(マタイ 2章)と重ねることで、イエスが誕生したことを暗に示していると考えられる。

そして、12章に入って、マリヤがナルドの香油をイエスの足に塗ったこと(12:3)が、イエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受けたことと、重ねられている。Smith が指摘するように、ヨハネの福音書にはイエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受ける場面が描かれていない(前掲書、p.32)。ヨハネ 1:29には「ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て…」と書いてあるだけで、イエスが洗礼を受けたとは書かれていないのである。これは、ヨハネ 12章でのイエスの受洗と重複するのを避けるためであろう。ヨハネの福音書の巧妙さには驚くばかりである。こうして11章の終わりから12章の始めに掛けて、イエスの誕生と受洗が目立たないように、さらりと語られているのである。

## 第 2 節 二つの過越で連結されているヨハネの福音書

ヨハネの福音書の背後の旧約と新約との連結が極めて滑らかであることの理由の 1 つとして本稿 2 章 2 節の図 1 で示したように、出エジプトが過越 I、十字架が過越 II というように、過越同士で連結していることが挙げられる。ヨハネの福音書がいかに関「過越」を意識している構成になっているかを、本節で説明する。

### 1 世の罪を取り除く神の小羊

バプテスマのヨハネはイエスが自分のほうに来るのを見て、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(1:29)と言った。さらに 36 節でも「見よ、神の小羊」(1:36)と言っている。記者ヨハネはこのようにして、イエスが過越のいけにえの小羊であることを読者に早い段階で予告して、福音書全体を過越で貫いている。

### 2 過越のいけにえの動物を追い出したイエス

記者ヨハネは 1 章に続いて 2 章でも、イエスが過越のいけにえであることを、「宮きよめ」の出来事で予告している。

《ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」》(2:13-16)

「宮きよめ」の出来事は共観福音書にも記されているが、いずれもイエスが十字架に付けられる直前の出来事であるので、ヨハネだけが何故 2 章という早い段階に「宮きよめ」を描いたのか、多くの注解者たちを悩ませて来た。Smith も「福音書記者はここで、こんなにも福音書の早い部分で、この話を物語ることによって何を達成しようとしたのであろうか」(前掲載書、p.36)と書いている。

ヨハネ 2 章に過越の祭りでの宮きよめがあるのは、背後の出エジプトの過越の出来事を表すためである。カナの婚礼の背後のナイル川の水が血に変わったのが十の災いの 1 番目、初子の死(過越)が 10 番目である。そして共観福音書の宮きよめには無い、「羊も牛もみな、宮から追い出し」という記述を挿入することで、イエス自身が動物に代わって過越のいけにえになることを予告したのである。

### 3 過越の食事の前の十字架

ヨハネ 19 章の十字架の日付も、多くの注解者たちを悩ませた問題である。共観福音書の十字架は過越の食事の「後」であったが、ヨハネは十字架を過越の食事の「前」に置いた。これは Barclay の解釈（1956、柳生訳、1968、p.383）、

「イエスが丁度過越の小羊がほふられるときに十字架につけられるように、ヨハネは時間を定め、その結果、イエスが、その民を救い、世の罪を取り除く偉大な過越の小羊とみなされるようにしたのである」

の通りであろう。こうしてヨハネ 12 章でのイザヤ 53 章の引用とヨハネ 1 と 2 章で予告されたイエスが過越の羊となることが 19 章で成就して、イエスは十字架上で「完了した」（19:30）と言ったのである。

### 4 私たちはみな、恵みの上にさらに恵みを受けた

本稿 2 章 2 節の図 1 で示したように、第一の過越の出エジプトの後では律法の恵みが、第二の過越の十字架の後には聖霊の恵みが与えられた。このことを記者ヨハネは、1 章のプロローグの中でも語っている。

《私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。》(1:16,17)

ヨハネの福音書のプロローグは、福音書全体の要約の役目も持っている。ヨハネの福音書はプロローグの段階から、この福音書全体を過越で貫く構造にして、その過越の恵みを私たちが受けていることを知らせているのである。

## 第 5 章 聖霊の恵みの取り入れ

### 第 1 節 贖罪の儀式のいけにえでもあったイエス

ヨハネの福音書には第一の過越の出エジプトと第二の過越の過越の十字架があり、第二の過越の十字架により、聖霊の恵みが与えられる。図 1 で示したこの図式は単純であるが、実は聖霊は過越だけで与えられるという単純なものではない。なぜなら、十字架の過越によって私たちの罪が無いことにされたとしても、私たちの罪が実際に無くなってきよめられたわけではないからである。私たちの体が聖霊が住む宮となるためには、私たちは実際にきよめられる必要がある。



ヨハネの福音書のイエスは過越だけではなく、贖罪の儀式のいけにえでもあった。そのことを秘かに示しているのが、ヨハネ 7 章の始めにある奇妙な記事である。この時、仮庵の祭りが近づいていたが、イエスは「わたしはこの祭りには行きません」(7:8) と言っていた。それなのに、その少し後で、イエスはエルサレムに上った。

《しかし、兄弟たちが祭りに上ったとき、イエスご自身も、公にではなく、いわば内密に上って行かれた。》(7:10)

「公にではなく、いわば内密に」という奇妙な表現は何を表すのだろうか。これは逆に【公】が何を指すかを考えたほうが良い。それは贖罪の日の儀式であろう。時は仮庵の祭りが近づいていたので、七月の初めの頃であった。七月は、十日に贖罪の日があり(レビ 23:27)、十五日から七日間にわたる仮庵の祭りが始まる(レビ 23:34)。イエスが「わたしの時はまだ来ていません」(7:6) と言いつつも、仮庵の祭りのために「内密に」エルサレムに上ったのは、贖罪のいけにえになる時がまだ来ていなかったもので、贖罪の日の儀式とは無関係にエルサレムに上ったということであろう。

以上の、イエスを贖罪の日の儀式のいけにえに見立てていることは、新約聖書の「ヘブル人への手紙」と重なる部分が大いにあると言えよう。

## 第 2 節 きよめの集会

仮庵の祭りのためにエルサレムに上ったイエスは、祭りの終わりの大いなる日、すなわち、きよめの集会(レビ 23:36)の日に、大声で言われた。

《だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。》(7:37,38)

さて、問題にしなければならないのは、上に続く、次の解説の挿入である。

《これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったもので、御霊はまだ注がれていなかったからである。》(7:39)

何故ヨハネは、わざわざこのような解説をしているのだろうか。聖霊に関しては、ヨハネ 3 章と 4 章にも記述があったが、そこでは、このような解説は無かった。

この解説の挿入はヨハネ 7 章のこの箇所が使徒 2 章のペンテコステの出来事と重ねていることを示すためであろう。使徒 2 章では、弟子たちに聖霊が注がれた後でペテロが人々に向かってヨエル 2:28-32 を引用して語っている。そのヨエル書には「きよめの集会のふれを出せ」ということばが 2 回 (1:14、2:15) 出て来る。つまり、ヨハネ 7 章のこの「きよめの集会」の箇所は、ヨエルによる聖霊の注ぎの「預言」と、使徒 2 章における聖霊の注ぎの「成就」の両方と重ねているのだ。そして、きよめのための聖霊は、【公】には過越ではなく贖罪の儀式の後に注がれた。十字架のイエスは、過越と贖罪の両方のいけにえだったのである。

### 第 3 節 御霊の一致

ヨハネ 13~17 章の最後の晩餐の場面でイエスは弟子たちに聖霊について教え、17 章では弟子たちが一つとなることができるよう、熱心に祈っている。この最後の晩餐の主題を一言で表すなら、「御霊の一致」と言えるのではないだろうか。13 章でイエスが弟子たちの足を洗ったことは、ピリピ人への手紙の「ご自分を無にして仕える者の姿をとり、(中略)、自分を卑しくし」(ピリピ 2:7,8) ということばを連想し、そして「あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください」(同 2:2) というパウロの言葉を思い起こさせる。また、15 章の「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」(15:5) は、エペソ人への手紙 4 章の、「平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです」(エペソ 4:3,4) を思い起こさせる。

以上からヨハネ 13~17 章の最後の晩餐の場面は、パウロの手紙とかなりの部分で重なっているということが出来るであろう。

## 第 6 章 新約の文書群をも取り入れているヨハネの福音書

### 第 1 節 共観福音書の取り入れ

前章で、ヨハネの福音書は旧約聖書だけでなく、ヘブル人への手紙、使徒の働き、パウロの手紙との関係も深いことを指摘した。ここで改めて、新約の文書群との関係を見ていくことにしよう。本節では共観福音書との関係について見る。

ヨハネの福音書が共観福音書を取り入れていることは、イエスの宣教・受難・復活という同じパターンで描かれているという一事をもって明らかである。ヨハ

ネは、この共観福音書の宣教・受難・復活というパターンに旧約と新約の文書群を重ね合わせて行くという手法を採ったのである。

また、パターンだけでなくヨハネは所々でマタイ・マルコ・ルカと同じ事柄や表現を取り入れている。例えば「成就するため」という表現は、マタイとヨハネだけに見られる表現であるので、ヨハネがマタイの表現を取り入れたと言えるであろう。ただしマタイの場合は「預言者を通して言われたことが、成就するため」としているのに対してヨハネは「聖書が成就するため」としている。ヨハネがいかに正典を意識しているかということが、ここから見て取れる。

マルコとの関係は、ヨハネ 6 章の五千人の給食の記事が面白い。五千人の給食の記事は四福音書の全てにあるが、パンを「二百デナリで買う」話があるのはマルコとヨハネだけである。ここでヨハネの福音書のイエスは奇妙なことを言った。

《どこからパンを買って来て、この人々に食べさせようか。》(6:5)

弟子がこう言うならともかく、イエスがこのようなことを言うのは、まことに奇妙である。それゆえヨハネは、「もっとも、イエスは、ピリポをためしてこう言われたのである」(6:6)と解説しているが、ますます奇妙である。これは、ヨハネが読者にマルコの福音書との関係を暗に示すための表現であると思われる。

ルカとの関係も色濃く現れている。マルタとマリヤの姉妹とラザロはルカとヨハネだけに登場する人物である。またヨハネ 21 章でイエスが湖上の舟にいる弟子たちに「舟の右側に網をおろしなさい。そうすれば、とれます。」(21:6)と言ったことはルカ 5:4-6 とそっくりである。或いはまた、本稿 3 章 3 節 2 の b で明らかにしたように、ヨハネ 3 章でバプテスマのヨハネがサムエルの役割を担っている。これは、バプテスマのヨハネがザカリヤの息子で、サムエルと同様にレビの家系の者であることを、ルカが明らかにしているが故のことではなかろうか。

## 第 2 節 使徒の働きの取り入れ

前章 2 節で、ヨハネ 7:37-39 のきよめの集会での出来事と使徒 2 章のペンテコステの出来事との関係を論じたが、使徒の働きは他でも取り入れられている。Seamands が指摘するように使徒の働きは「聖霊の働き」を記したものであり(1993、河村訳、2009、p.3)、ヨハネの福音書に聖霊に関する記述が多いことは、使徒の働きとの関係の深さを示していると言える。また、Martyn はヨハネの福

音書の中に 3 回現れる「会堂から追放」(ヨハネ 9:22、12:42、16:2) という表現について “History and Theology in the Fourth Gospel”の中で詳細な考察を行い、使徒の働きとの関係に言及している (2003、pp.52-56)。それによれば、イエスをキリストと告白する者をユダヤ人たちが「会堂から追放」したという記録はユダヤ教側にはなく、これに最も近いのが、キリスト教側の使徒の働きに出て来るパウロたちがユダヤ人たちから迫害を受けた記事である。ヨハネは、このようなユダヤ人たちの姿によっても使徒の働きを福音書に取り入れているのである。

### 第 3 節 使徒たちの手紙の取り入れ

#### 1 ニコデモはパウロ？

前章 2 節で、ヨハネ 13～17 章の最後の晩餐で説かれている「御霊の一致」が、パウロの手紙を取り入れたものであろうという指摘をしたが、ここでは、それに関連してヨハネ 3 章、7 章、19 章に登場するニコデモがパウロである可能性が高いことについて論じてみたい。

まず大前提は、「ヨハネの福音書はキリスト教の正典の文書を強烈に意識した書である」ということである。そして、キリスト教の正典にとってパウロの手紙は欠かせないので、パウロという人物も欠かせない。従って、ヨハネの福音書の中にパウロが何らかの形で登場していても少しもおかしくない、と言うより必ず登場していなければならない。そこで、ヨハネの福音書の登場人物でパウロに当てはまりそうな人物を探すなら、ニコデモしかいないし、ニコデモは十分にパウロになり得るのである。

##### a) 3 章のニコデモ

パウロが手紙で「御霊の一致」について書いていることや、使徒の働きに登場するパウロを見ても分かるように、パウロは聖霊に満たされていた人物であった。3 章のニコデモがイエスから直接、聖霊について教えられていることは、ニコデモとパウロの関係の強さを感じさせる。

##### b) 7 章のニコデモ

ヨハネ 7:50～52 でイエスを擁護したニコデモはパリサイ人たちから批判されている。これは使徒の働きでパウロがユダヤ人たちから迫害されたことを思い起こさせる記述である。

## c) 19章のニコデモ

新約聖書の中でパウロの手紙が占める割合を見るなら、パウロほどイエス・キリストのために働き、尽くした人物は他にいないと言っても良いほどである。ニコデモは十字架で死んだイエスのために没薬とアロエを混ぜ合わせたものを 30 キログラムも持って来た（ヨハネ 19:39）。それほど、イエス・キリストのために尽くした。没薬は防腐剤である。パウロの手紙により、私たちはいつまでも朽ちないイエス・キリストの恵みを知ることができる。ニコデモはパウロであろう。

## 2 ヘブル人への手紙

前章 1 節で説明したようにイエスは過越だけでなく贖罪の儀式のいけにえでもあった。イエスが贖罪の儀式のいけにえだったことを詳しく書いているのが、ヘブル人への手紙である。

ヘブル人への手紙よればイエスはいけにえの血を持って至聖所に入る大祭司でもある。捕縛されたイエスは大祭司の庭に連れて行かれたが、カヤパではなく、イエスこそが真の大祭司と言えるのであろう。

## 第 4 節 黙示録の取り入れ

ヨハネの福音書は 20:31 で一旦終わったような形式になっているので、21 章は後から追加されたような不思議な章である。この 21 章が黙示録と関係していることを次に示そう。

### 1 7人の弟子たち

ヨハネは 21 章の 2 節で 7 人の弟子がテベリヤ湖畔にいたと書いている。この 7 人の弟子たちは黙示録 2～3 章の 7 つの教会と重ねていると考えられる。

### 2 ナタナエルの再登場

ヨハネ 1 章に続いて、21:2 で再びナタナエルの名前が出ている。1 章でイエスはナタナエルたちに言った。

《天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。》(1:51)

このイエスのことばには二重の意味があると解釈できる。一つは、本稿 3 章 3 節 3 の a) で示したようにナタナエルは創世記のヤコブと重ねられているので、この「神の御使いたちが人の子の上を上り下りする」とはヤコブがベテルで見た夢(創世記 28:12) のことである。そしてもう一つは、黙示録 19 章以降で天から主イエスと御使いたちが下りて来る光景とが重ねられているのである。イエスがナタナエルたちに「いまに見ます」と言ったのは、終末におけるイエスの再臨のことであろう。

### 3 わたしの来るまで

ヨハネ 21 章でイエスはペテロに、

《わたしの来るまで彼が生きながらえるのをわたしが望むとしても、それがあなたに何のかかわりがありますか。》(21:22)

「わたしの来るまで」の「来る」とは主の再臨のことである。上述の 1:51 の他で再臨のことが示されているのは、ヨハネの福音書ではここだけである。ここにも黙示録との関連が見られる。

また、「彼が生きながらえるのをわたしが望む」とは、すぐに起こるはずの事を神がキリストに与え、キリストがこれをヨハネに告げたこと(黙示録 1:1) との関連が見える。

### 4 証人の記載

ヨハネの福音書は「これらのことについてあかしした者、またこれらのことを書いた者は、その弟子である」(21:24) と証人を具体的に挙げている(彼の名前は明示していないが)。これは、黙示録が「これらのことを聞き、また見たのは私ヨハネである」(黙示録 22:8) と証人を具体的に挙げていることとの関連が見える。ただし、日本語訳では両者の表現が酷似しているが、原語のギリシャ語ではそれほど似ているわけではない。

## 第 7 章 創世記～黙示録を一つの網に入れた恵み

### 第 1 節 153 匹の大きな魚

21 章でイエスと弟子たちが再び会った場面は、1 章での最初の出会いを思い出

させる。本稿 3 章で説明した通り、最初の出会いの背後には創世記のアブラハム～ヤコブの時代が重ねてある。つまり 21 章には創世記から黙示録までがコンパクトに納められているのである。そして、ヨハネ 21:11 の「153 匹の大きな魚」は、創世記から黙示録までのことを表していると考えられる。

《ペテロは舟に上がって、網を陸地に引き上げた。それは百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かったけれども、網は破れなかった。》(21:11)

ここで、「153 匹の大きな魚」についての極めて魅力的な解釈を提案したい。

まず「魚」であるが、ヨハネの福音書の場合、原語のギリシャ語では、ὀψάριον (オプサリオン) と ἰχθύς (イクスス) の 2 種類が使い分けられている。ヨハネ 6:9 と 6:11 の五千人の給食の魚はオプサリオンである。そして、このヨハネ 21 章も 9 節、10 節、13 節の魚がオプサリオンで、6 節、8 節、11 節の魚がイクススである。つまり網に入っている魚がイクススで、それ以外の魚はオプサリオンなのである。11 節の 153 匹の魚は網に入った魚なのでイクススである。しかも、「大きな」イクススである。よく知られている通り、イクスス ἰχθύς の 5 つのギリシャ文字は「イエス」「キリスト」「神」「子」「救い主」の頭文字である。それゆえ、魚はキリスト教の象徴となっている。

さて、共観福音書の五千人の給食の「魚」は、すべてイクススが使われている。それなのにヨハネの福音書の五千人の給食の「魚」にオプサリオンが使われている。それは、キリスト教の象徴であるイクススを、「**ここぞ**」という場所だけで使いたかったからであろう。その「**ここぞ**」が網に入った 153 匹の魚なのである。

153=51×3 である。3 は三位一体の 3 と考えて良いであろう。

そして 51 は、旧約と新約の文書を合わせた数である。キリスト教の正典は、旧約聖書 39 巻と新約聖書 27 巻の 66 巻から成るが、旧約聖書 39 巻をヘブル語聖書の数え方で I サムエルと II サムエルを合わせて 1 巻、列王記を 1 巻、エズラ・ネヘミヤを合わせて 1 巻、歴代誌を 1 巻、十二小預言書も 1 巻とするなら、全部で 24 巻となる。すると、旧約 24 巻+新約 27 巻で合計 51 巻となるのである。

この 51 巻という数字は、現在私たちが手にしている聖書の中の文書の巻数とちょうど合うのであるが、正典の文書が確定したのはヨハネの福音書の執筆以降であるから、数が合っているのは、たまたまであろう。しかし、網に入った「大きな魚」の数の 153 が何を表すのかの、良き示唆を与えてくれる。ヨハネの福音

書はキリスト教の正典を強烈に意識した書であり、それらをまとめた書であるから、執筆当時に正典にすべきと考えられていた文書の数の合計が 51 巻であったということは、大いに考えられることである。

以上より、具体的な書が現在と同じかどうかは分からないが（信仰的には同じと考える）、153 匹の魚は、父・御子・御霊の三位一体の神が旧約と新約の文書 51 巻を一つにまとめたものであるということを、新たに提案したい。

## 第 2 節 初めからあったヨハネ 21 章

153 の解釈はともかく、魚のギリシャ語が「オプサリオン」と「イクスス」の二通りあり、厳密に使い分けられていることは、ヨハネの福音書の解釈上、極めて大事なポイントである。編集史的な考え方では、ヨハネ 21 章は後の時代の編集により追加されたものと解釈されるであろうが、それではヨハネ 6 章の五千人の給食の魚が「オプサリオン」であることを説明できない。前節で述べたようにヨハネ 6 章の「オプサリオン」は、21 章の「オプサリオン」と「イクスス」の使い分けを視野に入れて使われているからである。ヨハネの福音書が完成した時点で 21 章が存在しなかったなら、6 章の魚には共観福音書と同じ「イクスス」即ち「イエス・キリストは神の子、救い主」が使われていたはずである。

理論上は、後に 21 章を追加した編集者が、編集時に 6 章の魚を「イクスス」から「オプサリオン」に変更したということも考えられるであろう。しかし、仮に後代の編集者が存在したとしても、彼がそこまでヨハネの福音書を深く理解していたとは思えない。もし後代にヨハネの福音書を深く理解できる者がいたなら、2 世紀以降にヨハネの福音書が謎に包まれてしまうことは避けられたであろう。従って 6 章と 21 章は同じ時代に書かれたものである。

以上から、ヨハネ 21 章は後の時代に編集により追加されたのではなく、執筆当初からあったと結論できる。ヨハネ 21 章は 1 世紀末には存在していたのであり、21 章の 153 匹の大きな魚が入った網は、創世記から黙示録までの旧約と新約の文書が三位一体の神によって一つにされたことを示していると考えられる。

## 第 3 節 執筆当時の恵み

ヨハネの福音書が執筆された当時の紀元 1 世紀末のキリスト教を取り巻く状況



がどのようなであったかの考察は、それだけで卒論 1 編分のページ数（30 枚程度）を要する重要な問題であるので、本稿で詳しく論じる余力は無いが、ローマ帝国による迫害、ユダヤ教との関係、キリスト教内部の異端の問題、使徒の召天による求心力の低下、分派・分裂など、様々な問題があったことであろう。そのような中でヨハネの福音書が執筆されたのである。

ここで、153 匹の大きな魚が入った網に再び注目してみたい。

《ペテロは舟に上がって、網を陸地に引き上げた。それは百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かったけれども、網は破れなかった。》(21:11)

網は破れなかった。網の中には、三位一体の神によって一つになった創世記から黙示録までの文書が入っている。一つ一つの文書は、もともとは違う人々向けに書かれたものである。ユダヤ人向け、ガラテヤ人向け、コリント人向け、ローマ人向けなど様々である。広い地域に分散して存在する各教会は、これらの文書を少しずつ持っていた。一つの教会が全ての文書を持つことはなかった。従って、それぞれの教会は少しずつ考え方が異なり、使徒の死とともに横のつながりも失われて行った。このような中で教会は次第に衰弱して行き、やがて消滅する危機にあったのではないだろうか。

この危機に際して三位一体の神はヨハネに靈感を与えて、すべての文書の一つの網の中に入れる書を書くことを促したのではないだろうか。ヨハネ 17 章でイエスは祈った。

《わたしは、あなたがわたしに下さった栄光を、彼らに与えました。それは、わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。》(17:22,23)

こうしてヨハネの福音書が書かれると同時にキリスト教の正典の編成が進み、キリスト教徒は一つになることができたのだと私は思う。主の網は決して破れない。主の網の中で皆が一つになることができたのだ。

#### 第 4 節 現代の私たちに注がれる恵み

21 世紀に生きる現代の私たちも主にあって一つにならなければならない。ヨハネ 21 章でイエスは弟子たちに言われた。

《平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたが

たを遣わします。》(20:21)

そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。

《聖霊を受けなさい。》(20:22)

この時、イエスは三度も「平安(平和)があなたがたにあるように」(20:19,21,26)と言った。これは、パウロが次のように書いているのと同じであろう。

[平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。](エペソ 4:3-5)

昔も今も、そして未来においても、私たちは聖霊の恵みに満たされて、主にあって一つにならなければならない。そして、平和な世界を作らなければならない。

私たちが心の奥底で求めていることは平和である。イエス・キリストとの真の出会いを経験するまで、人はそれが分からない。平和は聖霊によって与えられるものだからである。それゆえ、イエス・キリストを知らない人は、私たちが本当に作らなければならない目標とすべき真の平和を知らない。そのような人々を私たちはイエス・キリストのもとに連れて行かなければならない。すると、イエス・キリストは私たちが連れて行った人々に話し掛けて下さる。

《あなたがたは何を求めているのですか。》(1:38)

《来なさい。そうすればわかります。》(1:39)

ヨハネの福音書を読むと、人はイエス・キリストに実際に出会うことができる。この書には聖書 51 (66) 卷分の神のことばが詰まっている。そのことばを語っているのがイエス・キリストであり、聖霊が人とイエス・キリストとの出会いを取り持って下さる。こうして真の平和を知る人が一人一人増えていくことにより、平和な世界を実現することができる、と私は信じる。私たち一人一人を通してイエスが行われることをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができない (21:25) ほど、イエス・キリストは今も働いているからである。

## おわりに 不思議な聖霊体験

2011年6月17日の早朝、いつものように姫路教会の会堂で祈りの時を持ってから、私はその日の聖書通読の箇所であったレビ記1章を開いた。すると読み始めて間もなく、涙がボロボロと出て来て止まらなくなった。父親が幼な子に愛情

たっぷりに手取り足取り教えている様子が、ふと心に浮かんで泣けたのである。

レビ記を読んで泣く。これは私にとっては有り得ないことであった。なぜなら私は高津教会の一般信徒であった時、何度か聖書通読に挑戦したものの、いつもレビ記で挫折していたからである。有り得ないことが起こったのだから、これは聖霊の働きによるものだと考えて間違いない。こうして私はこの聖霊体験により、律法は恵みであると確信した。特に信仰が幼い者にとっては、神との関係を築くために、律法は必要な恵みなのだとすることを確信した。そして、この時から私のヨハネの福音書の理解が急速に進み、間もなくして、天の父の声、

《わたしは栄光をすでに現したし、またもう一度栄光を現そう。》(12:28)

が何を意味するのかを知らされたのである。それ以来、これまでヨハネの福音書で謎とされていたことが、次々と分かり出した。これは素晴らしい経験であった。

私が4年前に与えられた召命のみことばは、イザヤ 52:7 である。

[良い知らせを伝える者の足は山々の上にあつて、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる」とシオンに言う者の足は。]

私は主の平和のメッセージを人々に取りつぐために召された。そして今、主は私にヨハネの福音書を用いて人々に平和を告げ知らせるよう、おっしゃっているのだと思う。それはつまり、創世記から黙示録までのキリスト教正典の全ての書を用いよということである。召命のみことばが与えられてから4年後に卒業論文として本稿を書き上げることが出来たことは、大きな喜びである。主は本当に素晴らしいお方だ。

最後に、お祈りと様々な支援により、私の神学生生活を支えて下さったイムマヌエル聖宣神学院の教職員の先生方、神学生の皆さん、全国のインマヌエルの教会の先生方と教会の皆様、関係する教団の先生方と教会の皆様に、心より感謝申し上げます。

2012年2月 姫路教会にて

## 引用文献

- 朝比奈悦也 (1997) ヨハネの福音書 (東京、イムヌエル綜合伝道団出版局)
- Barclay, William (1956) ヨハネ福音書・下 (柳生望訳、1968、東京、ヨルダン社)
- 藤本満 (2005) 祈る人びと (東京、いのちのことば社)
- Kinlaw, Dennis F. (2002) エマオの道で 365 日の霊想 (山崎忍、小川宣嗣、矢木良雄訳、2006、東京、福音文書刊行会)
- Kostenberger, Andreas J. (2004) John (Grand Rapids, Baker Academic)
- Lloyd-Jones, M.D. (1995) 旧約聖書から福音を語る (Catherwood & Desmon 編 中台孝雄訳、2008、東京、いのちのことば社)
- 牧田吉和 (1991) 「三位一体」、新キリスト教辞典 (東京、いのちのことば社)
- Martyn, J. Louis (2003) History and Theology in the Fourth Gospel, 3<sup>rd</sup> edition (Louisville, Westminster John Knox Press)
- Michaels, Ramsey J. (2010) The Gospel of John, The New International Commentary on the New Testament (Michigan, Eerdmans Publishing)
- Morris, Leon (1995) The Gospel According to John (Revised), The New International Commentary on the New Testament (Michigan, Eerdmans Publishing)
- 村瀬俊夫 (1973) ヨハネの福音書、新聖書注解 1 (東京、いのちのことば社)
- Ramm, Bernard (1956) 聖書解釈学概論 (村瀬俊夫訳、1963、仙台、聖書図書刊行会)
- Ridderbos, Herman N. (1992) The Gospel of John (John Vriend 英訳、1997、Michigan, Eerdmans Publishing)
- Seamands, John T. (1993) 新しい朝に (河村従彦訳、2009、東京、イムヌエル綜合伝道団出版事業部)
- Smith, D.M. (1995) ヨハネ福音書の神学 (松永希久夫訳、2002、東京、新教出版社)